

「臨床のための肝臓病理」

北里大学名誉教授 奥平 雅彦 著

金沢大学教授・第2病理

中 沼 安 二

著者の奥平名誉教授が長年にわたり心血を注がれた、肝臓病理の教科書である。まず第1に、本書の特徴は、わかりやすく、噛み砕いた文章で記述してある点である。すべての文章、1つ1つの言葉に長年の研究と経験がにじみ出ている、奥平肝臓病理の集大成である。

肝臓全体の病理の教科書、特に5,000例に及ぶ剖検例での経験を豊富に取り入れ、かつ1つの教室でまとめ上げたものは、わが国では本書が最初であろう。

本書は13章から構成されている。第1章“肝臓の発生、構造と機能および外形の異常”は、従来の肝臓の教科書では最もわかりにくい領域であるが、本書では平易な言葉でだれにでもわかるように説明されている。第2章“肝臓の循環障害”は著者の最も得意とする領域で、特発性門脈圧亢進症の項が特に理解しやすい。第3章“肝臓の代謝障害”と第4章“黄疸”は、著者の長年の経験をもとに、オーソドックスに記述してある。第5章“ウイルス肝炎”と第6章“自己免疫性肝炎・薬物性肝障害”は、進歩の著しい領域で、臨床の肝臓専門医には物足りない内容かもしれないが、肝臓病理としては最も教科書的な記載であり、常に頭の中に

入れておかねばならないことが整理して記述されている。第7章“非ウイルス性の肝感染症”は、著者のもう1つの専門領域である真菌症がふんだんに取り入れられており、重みがある。第8章、第9章“肝腫瘍(I)(II)”は、著者らが日本肝細胞癌研究会で発表された成績が中心となっており、特に転移性肝腫瘍での深みのある記述は、一般の病理医にもぜひ読んでもらいたい。第10章“肝細胞癌類似病変”は、いずれも典型例の写真が示してあり、日常の病理診断に役立つガイドラインが示してある。第11章、第12章の“肝硬変”は、著者のご出身である東京大学病理学教室での伝統的な研究の紹介を含め、記述してある。ところで、甲乙型を含めた通常型肝硬変の病理学的分類一般に言えることであるが、肝炎ウイルスの生物学的性状や臨床病理学的意義が明らかになってきている中で、見直す時期に来ていると考えるのは私一人ではあるまい。これは、肝硬変の病理学的分類一般についても言えることである。肝硬変の病態生理、特に血行動態からの肝硬変の見方には、奥平病理の真髄を見る思いがする。第13章“肝生検光顕標本の評価”は、ぜひとも臨床医に読んでもらいたい。わが国では肝臓

専門医が少ないので、多くの病院では臨床医が臨床診断をもとに肝生検で病理診断を下している。これは良くない現象なので、ぜひとも臨床医にはこの章を読んでもらい、side effectsを少しでも少なくしてほしい。

また、200枚近いカラー写真はきれいで、要所を得た図表も説得性があり、理解しやすい。いずれも、著者とその門下生の長く、情熱に満ちた、そして豊富な研究歴の、その時代の記念塚の写真であり、また症例であることが肌で感じられる。著者のお人柄が感じられる。

著者ならびにその門下生の汗と血の結晶が、それほど大きさをなく、コンパクトにまとめ上げられており、肝臓を専門にする臨床医、病理初心者の教科書として利用されることを勧めたい。また医学部学生や医系の大学院生諸君もぜひ読破してほしい書である。

最後に本書が、更に改訂、改版され、磨き上げられ、わが国でのスタンダードの肝臓病理の教科書になることを期待したい。

●B5 頁160 図28 写真42 原色図197 1995 定価6,077円(税込) 千400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)